



初春に宗像大社を参拝して

このコラムでは、私が定期的に代々木八幡や神宮に参拝していることを述べさせていただきたいが、新年を迎えるにあたって、平成30年からは参拝したことがない神社を1年間に3つずつ新たに参拝することを目標としてあげていた。そして、今回、宗像大社（むなかたたいしゃ）への参拝となつた。最初に宗像大社を選んだのは、昨年、ユネスコの世界遺産に登録されたことが大きく影響している。

宗像大社には、天照大神の三柱の御子神が祀られている。田心姫神（たきりびめのかみ）が沖津宮（おきかみ）が中津宮（なかつぐう）に、市杵島姫神（いちきしまひめのかみ）が辺津宮（へつぐう）に祀られており、これら三女神を総称して宗像大社と呼ばれている。そして、これら宗像三女神は、道主貴（みちむしのむち）と呼ばれているが、この「貴」（むち）という名は、最も高貴な神に与えられる尊称であり、三女神以外、「貴」が付けられているのは神宮の大日靈貴神（おおひるめのむち／天照大神の異称）と出雲大社の大己貴神（おおきみ）と出雲大社の天照大神（おお

なる最も尊い神として我が国では崇拝されており、交通安全のお守りは宗像大社が発祥とされている。すでにテレビにて放映されているように、この沖津宮がある沖ノ島は九州と朝鮮半島を結ぶ玄界灘のほぼ中央にある島と報道され、辺津宮と中津宮と沖津宮を一直線で結ぶと朝鮮半島の釜山の方向に向かうとつぐう）に、湍津姫神（たぎひめのかみ）が中津宮（なかつぐう）に、市杵島姫神（いちきしまひめのかみ）が辺津宮（へつぐう）に祀られており、これら三女神を総称して宗像大社と呼ばれている。そして、これら宗像三女神は、道主貴（みちむしのむち）と呼ばれているが、この「貴」（むち）と神体であり、古代からの風習を守り続け、現在でも女性が立ち入ることができるが、男性でも上陸前に禊ぎを行わないと上陸できない。

鳥居を通り大きな一枚の石でできている見事な手水鉢で清めて辺

津宮拝殿を参拝させていただき、その後、御神木である相生の樺の前に立ち、ゆっくりと静かに手を合わせてから左に曲がり、第2宮、第3宮と参拝させていただいた。

第2院が田心姫神の分霊をお祀りしており、第3院が湍津姫神の分院をお祀りしていることから、辺津宮に参拝することで、實際には辺津宮から距離の離れた沖津宮と中津宮に参拝することができる。しかも、社殿は第60回神宮式年遷宮に下賜されたものということ

で、とても厳かな感じがする。

その後、緑に囲まれた階段のある道をゆっくりと確かな足取りで登つていくと高宮斎場が目の前にあらわれてくる。私はこの場所に行き着いた時、ただただ感動した。今までの人生の中では、神社に参拝させていたところも有名な話である。

なお、沖津宮は、沖ノ島 자체がご神体であり、古代からの風習を守り続け、現在でも女性が立ち入ることができるが、男性でも上陸前に禊ぎを行わないと上陸できない。

鳥居を通り大きな一枚の石でできている見事な手水鉢で清めて辺

津宮拝殿を参拝させていただき、その後、御神木である相生の樺の前に立ち、ゆっくりと静かに手を合わせてから左に曲がり、第2宮、第3宮と参拝させていただいた。

折しも、恩師が札幌医大病院に救急搬送され、集中治療室にて治療を受けている。まだ意識が戻っておらず、まわりにいる私たちはただその快復を祈ることしかできない。もともと、年末に決めていた参拝の予定ではあつたが、何かのお導きだと思いつ、北海道の天気が大きく崩れる直前に福岡に向かうことができた。このような状況の中で、「国民のあらゆる道をお導きになる最も尊い神」である三女神を参拝でき、しかも、庭上祭祀の場所である高宮斎場を目の前にしたとき、九州長崎出身の恩師が何とか快復され、2人でゆっくりとこの場所を歩きたいと強く願つた。

宗像大社の高宮斎場を一度は参拝されると、古来からの日本人がどのように祭祀を始めていたのかについて時空を超えて考えることができる。